Ⅳ. 思　い　出

思　い　出

——第1回講演大会の頃——

塩　沢　正　一

（本稿は塩沢先生が 88 才のご老齢のため，直接ご自宅でお話を伺って記録したものであります.）

日本鉄鋼協会第100回講演大会を迎えるに当り，講演大会が開催され始めた頃について，思い出すままに話をしてみたいと思います.

私は大正9年海外留学を終えて帰国した後，大正 11 年1月，田中清治先生のおすすめで編集委員になり，鉄鋼協会に直接関係するようになりました.

当時，会長は俵国一先生で，編集委員は足立泰雄氏（商工省），川上義弘氏（陸軍→神戸製鋼所），杉村伊兵衛氏（東京高等工業学校・現在の東京工大），田中清治氏（東京帝国大学），室井嘉治馬氏（海軍→住友）と塩沢の6人でした．その翌年には三島徳七氏（東京帝国大学），石原善雄氏（日特）が就任されました．編集委員会の仕事はあまりいそがしくなく，校正をしたり，原稿を選ぶのが主なことでした．ただ原稿を集めることには苦労いたしておりました．当時，高炉があつたのは八幡製鉄所，釜石製鉄所，日本鋼管ぐらいで，八幡の最大高炉が 150 t でした．将来高炉の大きさはどの程度になるだろうかとよく話題にしていましたが，450 t までにはなるだろうと話していたのが思い出されます．また当時の理事は同じ方が就任されておりましたが，吉川晴十先生が会長（昭 19.4～21.3）の頃から理事が交替されるようになり，山田良之助氏が庶務，田中清治氏が編集，塩沢が会計，各担当理事として毎週土曜日，協会にかけつけ帳薄を調べるなど，協会の事務局がまだ小さかつたため，皆な協力しあつてやつていたことが思い出されます.

当時事務局は新橋駅から 60 m 程，烏森の待合の真ん中にあつた2階建ての建物の中にございました．2階の小さな部屋が事務局で，1階には旋盤，引張試験機等の機械試験機があり，生方（きかた）さんと言う方が外部からの依託試験をやつておられました．この建物は大正 12 年の関東大震災でつぶれ，その後工業倶楽部，三菱3号館，同仲 14 号館，ぬり彦ビル，交通公社ビル，経団連会館と移つて行きました.

定期的な講演会が始まる以前は研究発表会のようなものはなく，海外より帰国された方などがおられると，先の烏森の事務所の奥にありました畳 10 帖ほどの部屋でお話を伺つたりしていました．参加者も非常に限られ，理事や編集委員 14, 5 人程度でした.

協会が創立 10 周年を迎える大正 14 年，当時の河村驍会長が協会活動に熱心で，色々検討され 10 周年記念行事の一つとして第1回講演大会を企画，実施されました．第1回大会は帝国鉄道協会講堂（現交通会館・有楽町）で開催され，出席者が 70 名にのぼり，河村会長が非常に喜んでおられたのが今でも思い出されます.

講演数はまだ製鉄所が日本製鉄，釜石，日本鋼管と3社の頃でわずか十数件でした．講演内容も鉄鋼業の将来とか，世界の趨勢のような大きなテーマが多く，研究的なテーマでは石川登喜治氏（海軍）の講演程度だつたと思います．講演時間は1講演1時間でした.

また，晩さん会も同会場の食堂で開催されましたが，17 名程度の参加者で，野田鶴雄海軍中将のように偉い方ばかりでした.

第1回開催後，定期的に講演大会が開催されるようになり，また，春秋と年2回開催されるというように，益々盛大に発展していきました.

以上，第1回大会の頃を中心に思い出すままに話をして終りたいと思います．　（元会長）

思　い　出

菊　池　浩　介

私は，昭和 17 年から 29 年まで，12 年間にわたつて会誌「鉄と鋼」の編集委員又は委員長として，編集に従事しました．その間に理事，常務委員も拝命しましたが，そうした関係で今回の思い出話の1人に引つぱり出され

たと思います．この間は大戦の始まりから終戦，終戦から復興と変転極まりない時代でした．

昭和 19 年 11 月に空襲によつて会誌の印刷所が焼失し，終戦後はすべてが虚脱状態にあり，印刷所は無く，紙は無しで会誌の発行には非常に苦労しましたが，21 年の 11 月に 14 頁の会誌をやつと発行することができました．23 年7月号からようやく毎月発行となりましたが 22 頁のうすいものでした．その後国内事情が回復するにつれ，用紙の割当ても増し 28 年には 100 頁と順調な成長をとげました．

また年中行事の講演大会も 20 年は休止の状態でしたが，21 年秋には再開されました．初めは講演数も少なかつたのですが 23 年頃から東京の大会では 100 以上となり，会誌より早く軌道にのつた観がありました．

さて本文の目的である講演大会については，編集委員としては目立つた働きもしませんでした．講演大会がある度に，集まつてきた論文を区分けして，講演順番を決めるぐらいが仕事でした．しかし私は講演大会にはよく出席しましたので，参加者として印象深かつたことをふり返つて見たいと思います．

24 年秋の日本製鉄八幡製鉄所での大会……当時の会告によると講演会，見学とも昼食は弁当をご持参下さいと書いてあり，食料事情もまだ苦しかつたことがしのばれます．この大会に私も参加しましたが，宿舎で一寸した椿事がありました．協会の役員はある宿舎に一緒に泊つておりましたが，ある朝講演会に出かける前，二階の階段で話していた金谷主事があつという声とともに後向きのまま上段から，真逆かさまに転落しました．人事不省が続き脳出血ではないかと心配しましたが手のほどこしようがなく，山岡会長の計らいで八幡製鉄所の付属病院に送つていただきました．その後幸い意識を回復し，数日の入院で帰京されましたが，びつくりした事件でした．

第 1 回国際冶金会議（昭和 26 年 10 月アメリカデトロイトで開催）……この会は鉄鋼協会の大会とは関係はないのですが，戦後最初の国際的学会として協会にも招待状がきましたので，三島前会長を団長として 20 余名が参加しましたので紹介しておきます．この会は ASM 主催で会議の前には長い見学旅行が組まれていました．日本からの一行がサンフランシスコに着いた日，やつと講和会議が成立したという時代でした．当時の記録を見ますと 20 ヶ国から 195 名が参加し，1 位がドイツの 31 名，2 位が日本の 22 名です．またアメリカは主催国として多数の参加者がありました．

この大会の特徴は，参加者は専門別の 8 班の見学団に編成され，24 日間各所の工場を見学し，講演大会その他はデトロイトで 1 週間にわたつて行われ，日本からは10 数篇の論文が発表されました．戦争のため長く閉ざされていた私達にこの大会は非常に刺激になりました．特に鉄鋼，自動車工業が現在アメリカの技術を追い越したことは当時の工場を見てその技術水準の高いのに驚いたことを思い感無量です．私はニューヨークから見学旅行に出かけるときに，新しい靴をはいて出かけましたが，帰国するときには靴のかかとのゴムを取りかえる程減つていました．全くよく歩いた見学旅行でした．

14 年秋満州における大会……私がもつとも興味をもつて参加したのはこの大会でした．下関を船で出発し大連に上陸，鞍山を始め鉱山，製鉄所，工場等を見学し朝鮮を経て帰国したのでしたが全行程は 20 日位でした．参加者は内地から 131 名，満州側 125 名であり今様にいえば豪華なツアーでした．講演大会は奉天の満州医科大学で行われ 27 の論文が発表されました．一方満州の広大さと資源の豊富さに驚嘆しました．

鉄と鋼誌上の当時の記事を読みますと，奉天滞在の最後の夜に一部の人々は予定を変更してハルピンに向うと記されています．見学予定にはハルピンは無かつたのですが，切角奉天まできたのだからハルピンを見なくては帰れないと，同行の希望者を募りかなりの人数が夜行列車でハルピンに行くハプニングがあつたのです．私もその 1 人でエキゾチックなハルピンを楽しむことができました．また予定変更も大陸的で，まことに面白いはからいであつたと思います．

29 年秋の高岡市での大会……この大会は私にとつてもつとも印象深い大会でした．私は当時日本鋼管に勤務しておりましたが，その春高岡市の近くにある富山電気製鉄所に転任致しました．転任早々秋の大会が高岡市で行われることを知り，石原富山大学学長を実行委員長に私も副実行委員長の 1 人として準備にとりかかりました．不慣れな土地でしたが寄付金集めにとびまわつたりして無事大会を終えることができました．大会には東京の在任中に一緒に仕事した協会の役員の方々や，旧知の人が多く集まられ，私にとつては思いがけない懇親の場を得ました．見学の最終日，黒部の渓谷を探勝し，宇奈月温泉で疲れをいやしましたが，多くの知人や旧知の編集委員の人達と語り合うことができ楽しい一夜でした．

戦争一終戦一再起の 12 年間は鉄鋼協会にとつても大きな苦闘の時代でした．この苦しい時代に私もその再建に微力をつくすことができたことを，今ふり返つて見て懐しく思います．（元理事・編集委員長）

講演大要と講演論文

佐　藤　忠　雄

終戦直後の春秋大会の講演数は，毎回 100～130 程度であつた．各論文の講演前刷は，現在の会誌 1/8 頁程度の極く簡単なもので，講演大要録として，大会会場で出席者に配布されていたから，講演大会の出席者も，大会当日以前には，講演論文の内容を知ることがなく，予め考察を加えた上で聴講することができないから，講演後に質問する聴講者は皆無に近かつたことは当然のことと思われた．

講演された論文のうち，あらためて会誌に論説として投稿されるものは，年間 50～60 であつたから，講演総数の約 20～30% で，残りの 70～80% の論文の詳細な内容は，会誌に掲載されることがなく，雲散霧消していた．講演者が大会で論文を発表するに至るまでの，研鑽と研究費用はこれを集計すれば，年間莫大な額にのぼつていた筈であり，貴重な研究成果が会員に周知されることなく，埋没してしまうことは，学術技術の進歩発展に計り知れない損失であることが痛感された．

昭和 21 年に筆者は編集委員を仰付けられ，会誌の編集，春秋大会プログラムの編成に当つていたが，その間鉄鋼協会の使命達成のため，全会員と協会当局との連繋を計る唯一の方途は，当時としては春秋の大会と会誌がそのすべてであるところから，全会員に日本の鉄鋼に関連する学術技術の現状と研究の成果をあまねく周知徹底させる方策の一つとして，春秋大会で講演される研究論文の内容を総て記録にとどめ，これを全会員に配布することは，編集委員として当然考慮すべき最も重要な課題の一つと思われた．

講演前刷は昭和 22 年春期大会から，会誌と同じ大きさで，内容は各論文とも 1/2 頁程度に拡大され，昭和 22 年秋第 34 回大会では大要録を 10～12 月号として会誌に組入れ，全会員に配布された．当時協会は会員数の増加により内容の充実拡大を意図して，編集委員会においても，春秋講演大会の内容充実の方策を練り，その一つとして，講演前刷の内容を充実して，これを大会期日の数日前迄に全会員に配布し，講演される論文の内容を読み取つた上で大会に出席することになれば，おのづから講演の内容が充実されるであろうし，また論文の内容が会誌の特輯として全会員に配布されることによつて，その全容が記録にとどめられ，保存されることになり，会員に裨益するところはまことに大きいことと考えられた．

これらの方策を編集委員会で詳細に討議した後，実行に移すこととなつて，講演申込期日を繰上げ，これを厳守，前刷原稿枚数を 400 字詰 6～10 枚，図表 3 以内に増加して論文としての体裁を整え，大会期日以前に全会員に講演大要録として配布することを理事会に提案した．

理事会には編集理事として岡本正三博士（当時東工大教授）がその趣旨と内容を説明した．当日御出席の前会長俵國一先生から，「そのような難しい講演申込みの条件を付けたら，講演を申込む会員は面倒がつて，申込数が減るだろう」ときつい御意見があつた．岡本編集理事は困惑された様子であつたが，同席していた理事から懇切な賛成論もあつて，俵先生も「それでは十分に考慮して，講演申込数が減少しないような方法をとればよかろう．」と御了解が得られて，実施する段取りとなつた．昭和27年第 43 回の春期大会の講演大要録はその第 1 号であつた．

幸いに，懸念された講演申込数も 116 篇で，例年よりもむしろ僅かに増加して，編集委員は胸をなでおろした次第である．

その後一般会員からは好評を得たので，さらに一歩を進めて，講演大要を会誌に組込み，投稿論文と同様に，その内容を独立した論文として認めようということが編集委員会で討議された．その目的は，論文の投稿数が漸増し，会誌の頁数は経費の関係で制限されるため，投稿論文が会誌に掲載されるまでに，協会受付け後約 1 年以上経過する事態となつたことから，講演大要が講演論文として，投稿論文と同一に認められることによって，投稿論文数が減少することであろう，ということが一つであり，また投稿論文には割当頁数を増加して内容を充実させることが可能となろうということで意見が一致した．この方針が昭和 28 年第 45 回春期大会から実行に移されて，昭和 28 年 3 月号に特輯として講演大要が組入れられた．一般会員からは非常な好評を得た．

ただ，ここで問題となつたことは，講演論文を会誌に組入れて，特輯講演大要として印刷配布するために，編集事務が増加して，印刷能力との関係から，講演申込期日は著しく早まり，講演論文原稿執筆後，講演期日までの間の研究成果は次回講演大会まで発表を見送らねばならず，成果発表が遅滞し，その機会を逸するなどの異論も出た．しかし一般会員からの広い支持もあつて，その後しばらくは継続された．しかし編集事務能力と印刷能

力などの関係から，漸次今日のような形態に変遷した．

例年春秋の講演大会が盛況を示しているのを見るにつけ，講演論文として全論文の内容を「鉄と鋼」に掲載して，後々まですべての研究成果を記録にとどめることができた当時の編集委員会での熱のこもた討議のことなどを思い出して，感慨一入である．（元理事・編集委員長）

編集委員会の拡大強化と講演大会分科会誕生のころ

荒　木　　透

私は昭和 37 年頃より編集委員として編集委員会の仕事を手伝わせていただいた．当時は，会員数約 7000 人，春秋の講演大会の講演数は約 180 件という規模であつた．編集委員会全体で講演大会の運営に当つていたが，同時に「鉄と鋼」および Tetsu to Hagané Overseas（今の Trans. ISIJ の前身）の編集に加えて大会プログラムや講演大要集（活字印刷で紙面約 1.5 ページ割）の準備をこなすなど，委員の方々の苦労は大変であつた．

当時の鉄鋼協会は，田畑専務理事着任の間もなくの頃であり，協会の活動全般について，拡大強化し日本の鉄鋼技術の高揚のために積極的に貢献しようという大号令が三島会長，俵副会長からも出されていたことが記録に残つている．講演大会もパネル討論会の実施や，講演討議の充実など運営面で関係者の努力が重ねられていた．

昭和 40 年に理事として編集委員長を仰せつけられた私にとつて，この重責を果たすためには，委員会の組織と運営にかなりの改変を加えることが一つの廻り合せであつたように思われる．

編集委員会は大わけして 4 つの事業を受けもつていたので，まず「和文誌」，「欧文誌」，「講演大会」，「出版」の 4 分科会をつくり，それぞれ鉄と鋼，'Overseas の編集，講演大会の準備運営，協会出版図書の企画など，と役割りを分担してゆくこととした．編集委員会全体の企画運営は，各分科会の代表と若干の理事委員による編集運営委員会という形で協議して進めることとなつた．

講演大会分科会の運営において議論された新しい議題の一つは，当時の予講（講演大要集）の内容の充実である．それまでの大要集は本印刷で鉄と鋼の特別号として発行されていたが，一発表当りの割当ページ数が前述のとおりで図，表も少ない．講演を聴けなかつた人にも満足な内容をということから，昭和 39 年春の大会からの講演論文の頁を思いきって緩和して約 2 ページ半ていどとし，速報的論文の形態をとることとした．

この「講演論文集」は，春秋の講演大会の講演申込みとともに原稿を受けつけ，正式に査読委員を設けて詳しい査読修正を行なう．大会のプログラム編成までの限られた日数の間に編集を終えなければならない委員の方々にはかなりの重荷をかける結果となつた．しかし講演大会分科会および和文誌分科会の協力によつて，講演論文集を大会に間に合わせて鉄と鋼特別号として配布することは一応成功し，昭和 41 年度の春，秋大会において実施された．

講演を聴いた参加者には予稿としての役割りを果たし，不参加者にも参考文献として読み甲斐のある内容を提供して多くの会員読者に貢献したことと思われる．

講演大会の質的向上と同時に，より多数の有益な講演発表が集まり，討論が活発に行なわれることは時の鉄鋼協会の大きな方針であつたから，その線に沿つて種々の努力が払われ，講演数も急成長を遂げるようになつた．このことは講演論文集を持続する努力とは相容れない側面を有する．編集委員ならびに事務局の努力と能力にも限界があることから，講演数の急増に対処する方法を早急に考えねばならないこととなつた．

講演発表には，独創性や新規性の点からみて，講演発表の直前に重要な知識が得られるという性格のものがある．このような発表に対しては，小論文の形式で通常の査読編集を経て活字印刷校正にかける論文集の形式は日時がかかりすぎて適当ではない．そこで，発表者の手書きないしタイプによる原稿をそのままオフセット印刷する方法を取りあえず併用して，申込み締切日を思い切つて遅らせて実行することとした．

昭和 41 年秋季大会（第 72 回大会）は，講演論文集 I，II および講演概要集（オフセット刷）の 3 冊の予稿集が鉄と鋼として印刷配布された．講演数は一般 284 および討論会 25 の計 309 に達していた．さらに秋季大会は例年増加の傾向ということもあり，第 74 回大会からは思いきつてオフセットのみの概要集（鉄と鋼の黄褐色表紙のもの）の発行を大会に間に合わせることとしたが，講演数は大躍進を遂げて 350 を突破するに至つていた．実に 5 年前に比べて倍増の勢いを示し，とくに鉄鋼各社の研究所や現場技術者の研究発表，討論への熱意の旺盛となつていた時代背景が伺われる．講演論文は後日適当数が論文集に取りまとめられて特集号として発行さ

れた.

以上のような経過をへて講演大会の概要集の編集ならびに講演大会の運営組織はほぼ現在の形のものに定着してきた次第である.

思い返せば，昭和 45 年まで私の編集委員長在籍の5年間は，あたかも我が国の鉄鋼技術の急成長の時代にあたり，鉄鋼協会もその活動を華々しく伸ばした時期にあたつている．この間，講演大会の運営や編集の仕事を多くの先輩や有能な方々に導かれ御協力を得て楽しく努めさせていただいた思い出は，いま多くの貴重な経験と教訓をもたらしていることを感じる次第である.

(元会長・編集委員長)

編集委員会のことども

松　下　幸　雄

ちようど9年ほど前，本誌の随想に，これと同じ表題で筆者の雑文が掲載されている．これがたやすく頭に浮んだのは，筆者が本年4月の退官を前にして，いろいろな書き物を収録しておいたおかげである.

その当時は，初体験の本会編集委員長として，自他ともに許すほど大いに張切つていたと思う．その2年間の任期の後は，堀川一男氏が立派に責務を果され，筆者は再び昭和 49 年春から同 51 年春まで，中継ぎで委員長を務めた．ただ，この2度目はどうやら惰性で，大した働きもしなかつたのではないかと申訳なく思つている.

筆者が当協会の編集業務をお手伝いし始めたのは，丸の内の赤煉瓦時代（仲 14 号館）で，確か昭和 22 ～23 年ごろであつたと思う．その最後のお勤めが昭和 51 年春で終つているから，ともかく 30 年程何かの形で，会誌の編集とか春秋講演大会をお手伝いしたことになる.

1度目の編集委員長で，大変頑張つたようなことを言つたが，実は，その基本路線はすでにその前5年にわたつて，荒木透先生が確立しておられたので，あとは委員の方々や編集課諸氏ともども練つてゆけばよかつたのである．ただ，これは筆者の立場でのことで，第1線の現場を担当された諸氏は，拡大してゆく業務で大変な苦労を強いられていたのである.

大会の思い出というと，その準備のためのプログラム編成の方が鮮烈である．これは，春秋の2回，といつても1月末と7月中旬に，講演大会分科会と和文会誌分科会が合同して大挙都外に繰出し，寝食を共にしながら作業するのである．その翌日，同好の士は野外に出て，小さな白球で一喜一憂するのが常である．今では，当時筆者が親しく指導した(?)諸氏が，セミプロ級に成長してしまつている……．筆者は，このところ数年 OB(?)的な存在である.

ここで是非記録にとどめておきたいのは，ジュニア・パーティのことである．これは，堀川一男氏や郡司好喜氏ら，当協会の事務局の方々の並々ならぬご努力で，昨今，春秋の大会で名物でもあり，ハイライトでもある．なにも，大会初日の懇親会の向うを張つたものでもないが，老い(?)も若きも自由に放談して，楽しいフン囲気がかもし出されているようである．実は，筆者はこのところ逃げてしまつて，生の体験から少し遠のいている.

この起りは，昭和 45 年秋の大阪大会にさかのぼる．編集委員会，編集課職員，協会技術部部員らが相計つて，若手講演者（25 才～35 才までの会員が多かつた）を中心に，大会最終日の夕刻，宝塚ホテルに 70 名ほど招待した（その後は，いうまでもなく，多少の変動はあつても有料である）．その時の筆者の印象では，参加者の専攻分野が巾広く分布しており，彼等が講演大会に求めているものを聞けたり，学術講演を離れた社交の場としても楽しかつたと記憶している．その後，このパーティへの参加勧誘などで，編集諸氏が苦労された一時期もあつたが，今では何の抵抗もなく自ずと多数が集まるようであり，その時々の企画で実に楽しく運んでいることは，誠に同慶の至りであつて，今後もつともっと発展して欲しいものである.

(元副会長・編集委員長)